

人と組織の
新・論・点

CATALYST*

カタリスト

加藤源重

介護補助具をローテクで製作する「三河のエジソン」

頭は使うもの
知恵は振り絞るもの
汗はかくもの



今は三河のエジソンなんて呼ばれているけど、特別な才能があるなんて思っていないよ。中学校を卒業してからは、ずっと町工場で働いてきた。でも56歳のとき、仕事中に事故にあって右手の指をすべて失ったんだ。

もう一度箸を使って
ご飯を食べたい

食事のときはスプーンを使うんだけど、好物の刺身を食べても醤油がべったりついておいしくないんだ。もう一度箸でご飯を食べたくて義手メーカーに行ったけど、指が無いから無理だと全部断られた。それで帰り道に、箸を使える道具を自分で作るって決めたんだ。

アイデアはあった。箸は持てないけど、手に補助具を付ければ残った親指の付け根でレバーを押して箸を開いたり閉じたりできる。左手も足も使って一年以上かけてアイデアを形にした。でもなぜか箸の先端が数ミリ開いてしまう。なぜだろうと考えて右手をしげしげと見ていたら、指は上下じゃなくて内

側に曲がると気付いたんだ。すぐにレバーを調整したらできた！針も掴めるようになったんだ。

それからは私と同じような悩みを持つ人の助けになるような道具を作ってきた。仕組みは自分で考えるんだ。リューマチで指がうまく動かない人から、家の仕事を手伝うのに輪ゴムを一つずつ取れるような道具が欲しいと頼まれたときは、ティッシュのように取り出せないかと考えた。割り箸を立てて輪ゴムを組んでも最初はうまくいかない。でもとにかく手を動かす。いろいろ試すうちにヒントがつかめるものだから。

あの手この手を使っても、どうしてもできないときもある。そのときは奥の手を使うんだ。それは諦めないということ。頭を使って知恵は振り絞るもの。汗をかいて結果が出るまでやればいいんだ。

やろうと思ったってよく言うけど、思っただけじゃ駄目で、とにかくやるんだ。途中でやる気がなくならないかって？ そんなことはないよ、今日一日を頑張るだけだもの。焦ってもしょうがないからね。でき

ないときはなぜできないだろうって考える。私にはそのときが一番楽しいんだ。

片手でも干せる洗濯ばさみは8バージョン目で、最初のものからは部品も少なく小さく軽くなって、使いやすくて壊れにくくなって。でもまだまだ完成形じゃない。改善できるところはまだある。当たり前といったら当たり前のようなローテクで、仕組みを聞いたらなるほどって言えるものを作らないとね。こういうのは頭がいいとかじゃなくて、頭を使うだけなんだよ。

できないとは
絶対に言わない

要望は何でも受けて、絶対にできないとは言わないよ。今までできなかったことができるのが、どんなに嬉しいか、指を失くして初めて自分でもわかったからね。私が発明した道具で何十年ぶりに箸を使えたと喜んでくださる方の姿を見ると私も嬉しいんだ。今、たとえ手術で指を直せるとしても要らないと思っている。私の傷の手は宝なんだ。

文/内田美代子(編集部)

PROFILE かつう・げんじゅう

1935年、愛知県岡崎市生まれ。自助具制作の「福祉工房あいち」代表。三重大学非常勤講師。その他、早稲田大学、愛知産業大学など多数の大学、福祉関係団体、企業研修などでも講演。著書に「障害乗り越え発明人生」「自由への補助具」などがある。科学技術長官賞、特許庁長官奨励賞、東久邇宮記念賞など54の賞を受賞。